

1 【出題の意図と対策】

文学的文章（小説）の読解で、ここでは、桂望実の『たそがれダンス』が題材です。ダンススタジオに通う、仕事を定年退職した田中の視点から、大会の様子が描かれています。小説を読むときには、登場人物の立場に立って、その境遇や心情に寄り添いながら読むことが大切です。そのうえで、それぞれの設問について、何が問われているのか、文章中のどの部分が根拠となっているのかを確認しながら、解答していきましょう。

【解答】

- ① ㉔ どうよう    ㉕ かく（そうと）
- ② ウ
- ③ 例 振り間違えたとしてもその時に慌てない（19字）
- ④ イ
- ⑤ X 審判の裁量
- 例 肉体に刻まれたこれまでの人生経験が味となる、深いコクのある（29字）
- ⑥ エ

【解説】

② ポイント《ことばの意味を正しく理解できるかどうか》  
 ウ「泰然自若」は、落ち着いていて、どんな事態でも動じない様子を表します。ア「巧言令色」は、相手を見て言葉巧みにこびへつらうこと、イ「周章狼狽」は、あわてふためくこと、エ「付和雷同」は、自分の意見がなく他人に簡単に同調することです。

③ ポイント《文章の内容を正しくまとめられるかどうか》  
 「ミス」について、講師の米山は文章半ばの会話部分で「失敗しても、振りを間違えても構いません。それも味です。大事なのは間違えた時に慌てないことです。」と発言しています。この部分を、次の文の「たとえ」が「ことが大事」に当てはまるようにまとめましょう。

④ ポイント《人物の心情を正しく理解できるかどうか》  
 「鼻の奥がつんときた」は、泣きそうになった、ということですが。「僕たちと言った時も」とあるので、その前の「ぐっときた」「心は激しく揺さぶられた」「心が動かされて」と同じ意味だとわかります。また、米山が「僕たち」と言った言葉を探すと、「僕たちにもチャンスがあるんです」「僕たちは魅せるダンスで戦うんです」「僕たちの踊りを魅せ付けて来てください」の三つの言葉が見つかります。米山は実際に競技会に出て踊るわけではないのに、メンバーの一人であるかのように自分ごととして考えてくれていることに、田中は感動しているのです。

⑤ ポイント《文章の内容を正しくまとめられるかどうか》  
 「魅せるダンス」について、米山は「これまでの人生経験がその肉体に刻まれています。そうしたものは滲み出ます」と話しています。田中は、その話を思い出して「皆それぞれに精一杯生きてきた。その人生経験が味となるのなら、深いコクのあるダンスになるはずだ」と考えているのです。指定語句を手掛かりに、「魅せるダンス」が、「肉体に刻まれたこれまでの人生経験」が味となる「深いコクのある」ダンスであることを読み取りましょう。また、審査員については、米山の発言の中に「審査員に、審判の裁量が任されています」とあるので、この部分から抜き出します。

⑥ ポイント《文章の表現の特徴について理解できるかどうか》  
 アは、米山は「不安になっていて」「生徒に自信を持たせようとして言っているのだから、この程度のことではできてほしい」が誤り、イは、このあとに「そういうのしなくても、一つにまとまってる」とあるので「関係性があまりよくない」が誤り、ウは、直前に「ビギナーズメンたちは一様に表情を硬くした」とあるので「一人だけ表情を硬くする」が誤りです。エは、出版を前に自問自答する田中の様子に合っています。

2 【出題の意図と対策】

説明的文章（論説文）の読解で、題材は、畑村洋太郎『新失敗学 正解をつくる技術』です。前半は「記憶の減衰」について、後半は「社会の文化の移ろい」について書かれています。それぞれの内容については筆者の考えを読み取っていきましょう。論説文を読むときには、例に挙げられている事柄と筆者の意見を読み分け、文章の構造を考えながら、どんな話題に対してどのような意見を述べているのかを読み取ることが大切です。

【解答】

- ① ㉔ 専門    ㉕ 営（み）
- ② エ・カ（順不同）
- ③ ア
- ④ 例 記憶の集まりでつくられているので、人の世代の入れ替わり（27字）
- ⑤ X 大失敗を回避するための知恵    Y 足かせ
- ⑥ イ

【解説】

② ポイント《文法（助動詞）の知識があるかどうか》  
 「ます」と、エ「そうな」、カ「た」は、助動詞です。「ます」は丁寧、「そうな」は様態、「た」は過去の意味を表します。なお、ア「が」は助詞、イ「今にも」は副詞、ウ「降り（降る）」と、エ「走っ（走る）」は動詞です。

③ ポイント《文章の内容を正しく理解できるかどうか》  
 アは、「記憶の減衰にはプラスの面もあります」という記述がある第七段落の内容と合致します。イは、第二段落に『「六〇年」くらいすると、……たいていのことは忘れられています」とあるので、「完全に消滅してしまう」が合っていないです。ウとエは、第四段落に「文書に……減衰が起こります」「そういうもの（事実としてあったこと）でも基本的に『なかったこと』として扱われる」とあるので、ウは「永久に残る」の部分が、エは「事実としてあったこと以外」の部分がそれぞれ合っていないです。

④ ポイント《文章の内容を正しくまとめられるかどうか》  
 直前の一文に「活動している人の世代の入れ替わりが起これば、それに伴ってすべてが変化していく」と、変化の理由が述べられています。また、最後から三つ目の段落にも、「文化は同じ時代を生きている人たちの記憶の集まりでつくられている……人の入れ替わりが起こると変わっていきます」と、似た内容が書かれています。指定語句を手掛かりに、社会の文化は「記憶の集まりでつくられている」ため、「世代の入れ替わり」に伴って変化するという二点を押さえ、字数内でまとめます。

⑤ ポイント《筆者の主張を正しく理解できるかどうか》  
 最終段落に、「私たちの行動を後ろ向きにする足かせになるようなものはさっさと捨てつつ、……大失敗を回避するための知恵のような……大切なものは、ちゃんと受け継いでいくことが大事」とあります。これは、記憶のプラス面を説明した第七段落の「人々を後ろ向きな動き方しかできないようにしているような、 unnecessary 記憶もまた消えていく」と似た内容です。筆者は、記憶が減衰していくのと同様「社会の文化もまた移ろうもの」で、記憶も文化も、行動を後ろ向きにするようなものは捨て、知恵のようなものは残していけばいいと考えているのです。

⑥ ポイント《文章の内容を正しく理解できるかどうか》  
 アは、第五段落に「日本全体としては……考えずに動いている」とあるので、「日本全体で対策を行っている」の部分が誤りです。イは、第一段落の内容に合っています。ウは、第六段落に「貞観地震のことは……ほぼ消えていきました」とあるので、「多くの研究が続けられていた」の部分が誤り、エは、「意識がある」の部分が第四段落の内容と合っていないです。

3

【出題の意図と対策】

江戸時代の俳人、小林一茶と一茶の俳句についての解説文の読解問題で、筆者は、俳人の長谷川權です。江戸時代の俳人では、松尾芭蕉、与謝蕪村、小林一茶の三人が有名ですが、日常語の使用と個人の心理描写の点において、一茶は近代人であり、一茶の俳句は近代俳句であったと述べています。和歌（短歌）や俳句は、難解なものに感じられるかもしれませんが、表現技法（俳句の場合は、季語や切れ字）をしっかりと覚え、そのうえで、鑑賞していきます。今回の出題は解説文ですので、筆者の主張を押さえ、設問に答えていきましょう。

【解答】

- ① エ
- ② X 古典文学の教養
- ③ Y 自分を中心に考える
- ④ I 例 日常の言葉で生身の人間の心（13字）  
II 誰にでもわかる

【解説】

- ① ポイント 《季語の知識があるかどうか》  
「おらが世やそこの草も餅になる」の季語は「草餅（草も餅になる）」で、季節は春です。それぞれの俳句の季語と季節は、アが「初時雨（時雨）」で冬、イが「蚊」で夏、ウが「雁」で秋、エが「雪どけ」で春です。したがって、エが正解です。
- ② ポイント 《文章の内容を正しく理解できるかどうか》  
芭蕉、蕪村と、一茶の違いを読み取っていきます。次の文に、「芭蕉や蕪村には X があり……一茶は、X がなく」とあることから、X には、芭蕉や蕪村にあつて一茶になかったものが入るとわかります。「一茶の自分中心の考え方は」から始まる段落に「古典主義時代の芭蕉や蕪村」とあり、最終段落には「一茶は……古典文学とは初めから無縁の人だった」「古典文学の教養の欠落」とあることから、芭蕉や蕪村にあつて一茶になかったのは「古典文学の教養」です。Y は、直後に「近代市民」ということばがあることから、この言葉を手がかりに探していくと、三つの俳句の後に「一茶は自分を中心に考える一人の利己的な近代市民だった」とあるのが見つかります。ここから字数に合わせて書き抜きます。
- ③ ポイント 《文章の内容を正しく理解できるかどうか》  
アは、「江戸幕府に対する反発的態度」が本文に書かれていない内容です。イは《中略》のあとの二つの段落の内容に合っています。「この時代の要請にもっともよく応えたのが一茶だった」とあるように、一茶の考え方や資質が時代と合ったために「新しい型の俳人」となれたのです。ウは、「世の中のことに興味のない、悟った人物」が本文から読み取れない内容です。エは、本文に書かれていない内容です。
- ④ ポイント 《文章の内容を正しくまとめられるかどうか》  
I は、第三、第四段落に着目します。「この二つは近代文学の条件」で「いいかえれば一茶の俳句は……すでに近代俳句だった」とあるので、「この二つ」の内容をその前から探すと、「日常語の使用と個人の心理描写」をさしているのとわかります。また、その直前にも「一茶の句は日常のふつうの言葉で書かれ、生身の人間の心を描き出す」と似た内容が書かれています。「日常の言葉」で「生身の人間の心」を描く点を押さえて字数内でまとめましょう。また、II は、この「日常語の使用」と「古典文学の教養」を踏まえていないことが「誰にでもわかる」俳句につながっている点を押さえます。

4

【出題の意図と対策】

近年「読む」能力とともに、「話す・聞く・書く」能力の育成に力が入られています。入試においては、「書く」能力を判定する記述式の問題とともに、スピーチ・発表・話し合いなど、「話す・聞く」能力を判定する会話形式の問題も頻繁に出題されています。話し合いと資料の融合問題では、話し合いのテーマや話し合いの流れ、各人の発言の特徴をつかむとともに、問題で用いられている資料の意図も正確に読み取ることが大切です。資料の最も大きい数字に着目すると、資料の特徴をとらえやすくなります。

【解答】

- ① ウ
- ② イ
- ③ イ・ウ・オ（完答）
- ④ Y 例 エ（Y・Zで完答）  
Z 例 「その取り組みは、」伝統文化の継承やまちの活性化につながると思う。祭りの企画運営で地域の人同士の交流が活発になるうえ、祭りを見に来る観光客が増えるため経済的な効果も考えられるよ。（79字）

【解説】

- ① ポイント 《熟語の読み方の知識があるかどうか》  
「気軽」は、「気」が音読み「軽」が「がる」と訓読みをしているので、ウが正解です。音読み+訓読みは「重箱読み」とも言われます。
- ② ポイント 《資料を論理的に読み取ることができるかどうか》  
「恵太さんの意見が論理的なものとなるために」という設問文の条件に注意する必要があります。恵太さんは、X のあとで「昔からその土地にあるものを目当てに来る人が多いみたいだね。」と発言しています。その意見を裏付けるのは、どの年代でも「町並み散策」と回答した割合は三割超え、つまり人気があるが、スポーツやレクリエーション目的は一割以下、つまり人気がないことを説明したイです。アは、「歴史文化施設等の見学」の回答割合が「町並み散策」に次いで多いのは40代以上だけなので、合っていません。ウは、「食」とは「郷土料理」のことですが、50代、60代以上で回答割合が再び上がっているの、合っていません。エは、「スポーツ・レクリエーション」の回答割合が最も高いのは40代なので、合っていません。
- ③ ポイント 《発言の特徴を理解できるかどうか》  
アは、「恵太の示した具体例」とあることから、美和さんの二回目の発言内容を指しているとわかります。美和さんは「次の項目」の話はしていないので不適切です。イは、恵太さんの一回目、三回目の発言内容の説明として適切です。ウは、和也さんの二回目、三回目の発言内容の説明として適切です。エは、愛美さんの二回目の発言内容ですが、「解決策」は示していないので不適切です。オは、美和さんの最後の発言内容の説明として適切です。したがって、イ・ウ・オが正解です。
- ④ ポイント 《資料を適切に利用して、論理的な文章が書けるかどうか》  
一文目は【資料Ⅲ】に書かれた取り組みが、どのような課題解決につながるのかを【資料Ⅱ】や会話文を参考にしていると考えたとよいでしょう。二文目には、Yで選んだ取り組みの効果を具体的に書きます。たとえば、アは、まちの活性化や伝統文化の継承につながります。またその地域ならではの食を楽しむたい思いは外国の方にもありますから、訪日外国人の対策にもつながるでしょう。その効果としては、地元の人と観光客の交流や、屋台ならではの手軽さなどが考えられます。オは、地場産業の継承、働き手の不足対策につながり、地元の人との交流、農業の良さや地元の野菜を知ってもらう効果があると考えられます。